

西欧人名事始め

東光 博英

日本人で最初に西欧人名を名乗ったのはだれか。それは恐らく日本が西欧国と初めて直接交渉をもった16世紀の人であろう。ポルトガル人との交易やキリスト教の伝来によって日本人は、「鎖国」までの約1世紀間、南欧出身の人々と深く接触した。キリスト教が日本に広まり影響を与えたので「キリシタンの時代」とも呼ばれる。西欧の記録によれば、その最初はヤジロウと称する鹿児島出身の人とその他二名の日本人である。ヤジロウはマラッカでフランシスコ・ザビエルと出会うことでキリスト教の日本伝来を促した人物として知られる。日本の史料に名前を留めていないので漢字はわからない。彼と素性不明の日本人二名は、ザビエルの勧めでインドの神学校で学んだ後、洗礼を受けてキリスト教徒になった。この時、ヤジロウは「パウロ・デ・サンタ・フェ（聖信のパウロ）」、他の二人は「ジョアン」と「アントニオ」の洗礼名を授かった。クリスチャンネームである。翌1549年、ザビエルは彼らを伴って日本に渡来するのであり、これ以後ヤジロウは西欧人からパウロの名で呼ばれた。日本での布教が進展するにつれて大名から庶民にいたるまで信者が増え、1612年に徳川幕府によってキリスト教が禁じられた頃には約37万名に達していたという。換言すれば、37万もの日本人がキリスト教の聖人の名前など主にポルトガル語の名前を持っていたことになる。例えば、京都のキリシタンが自ら記した連署状には、中山太郎右衛門はう路（パウロ）、諸川忠次郎流いす（ルイス）、材木屋宗慶みける（ミゲル）、銅屋喜右衛門あんてれ（アンドレ）とある。本名と洗礼名を併記しているが、彼らは西欧の異風な名前を名乗ることにどのような思いを抱いていたのか。ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、日本人に甚だ好まれている名は「リアン（Leão）」だという。連署状には「里安」とか「理庵」とあり、当時の人にも名前の好みがあったようだ。また、キリシタ

ンの中にはポルトガル人と見紛う名前の人もいた。ザビエルが日本を去るとき同伴した大友義鎮の使者は受洗してロレンソ・ペレイラと称した。ロレンソが洗礼名で、ペレイラは彼の代父を務めた人の名をとったという。さらに目をひくのは、外国人宣教師が日本人の姓をポルトガル語に意識して呼んでいたことである（松田毅一『南蛮太閤記』）。イエズス会士の松田ミゲルはピニエダと言った。松を意味するポルトガル語のピニエイロと日本語のダを組み合わせたようであり、城ジョアンはジョアン・デ・トーレスと呼ばれた。宣教師らは日本の城の天守閣や櫓をポルトガル語でトーレ（torre=塔）と表現していたから、名前の「城」を複数形のトーレスに訳したのであろう。また、天正遣欧使節の一員として有名な原マルチノはマカオで没するが、埋葬記録にはマルティノ・デ・カンポスと記されている。これも名前が「野原」を意味するカンポスに訳されたものと言える。このように人名においても日欧の融合が見られて興味深い。またフロイスによると、豊臣秀吉は大坂城内の侍女たちに、信者でもないのにキリスト教の聖女の名前をつけて呼んでいた。フロイスはその理由を「日本では異教徒の女性たちの名前は滑稽（rediculos [sic]）だから」（『日本史』）と説く。なぜ滑稽なのか述べていないが、彼の別の著書『日欧文化比較』に、「我らの間では女性の名は聖女からとる。日本の女性の名は、鍋、鶴、亀、芥下、茶、竹である」（第2章47条）と記しており、女性の名が動物や植物、道具からとられているのを滑稽だと感じたのであろう。1590年代は日本で西洋ファッションが流行し、秀吉は吉野で観桜宴を開いたとき諸侯に南蛮服の着用を命じたくらいであるから、侍女らをキリシタン名で呼んだのも戯れのひとつであったに違いない。侍女らも互いにマリア、ルイザなどと呼び合ったのだろうか。そう想えば何とも微笑ましい。しかし、この時代に日本が西欧語の名称とともに受け入れた様々な文物はやがてキリスト教の禁止により大きく明暗を分けることになる。とりわけ洗礼名は名乗ることも口にすることもできなくなる運命であった。これもまた日欧交渉史の光と影である。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)